

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

尾高煌之助教授 退職記念座談会

著者	尾高 煌之助, 原 洋之介, 絵所 秀紀, 嶋田 晴行, ?見 誠良[司会]
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	73
号	4
ページ	603-666
発行年	2006-03-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/4799

第三部

尾高煌之助 教授
退職記念座談会

日 時：2005年12月1日（木）

場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス

ポアソナードタワー19階経済学部長室

テーマ：人と学問，研究生活の回顧

参加者：法政大学経済学部教授 尾高煌之助

東京大学東洋文化研究所教授 原 洋之介

法政大学経済学部教授 絵所秀紀

国際協力機構(JICA)アジア第一部 嶋田晴行

司 会：法政大学経済学部教授 霧見誠良

1. 七つの修業
2. なぜ労働なのか
3. 「マル経」と「近経」
4. 一橋大学経済研究所の共同研究
5. 「長期経済統計」の諸前提
6. 経済史における理論の役割
7. 「役に立つ」経済学とは？
8. 社会科学の方法と業績評価
9. 評価主義の問題点
10. 処女作に還る

1. 七つの修業

靄見 きょうは、尾高先生の法政大学の退職にあたって、皆様方にお集まりいただいてお話を聞く機会を設けました。尾高さんは7年前に法政大学にいらして、そして7年間、主に比較経済研究所で活躍なさっています。きょうはたくさん面白い話ができると思いますので、少しバトル気味にやりたいと思います。

最初に尾高さんのほうからお話を伺いたいと思います。

尾高 皆さん、お集まりいただき、貴重な時間をお使いいただきありがとうございます。

ぼくの、研究者としての成り立ちに影響を与えた人物と事件が七つぐらいあるんですね。あらためていま思い出しますと、一つは高校へ入るころまで、あるいは高校生だったころで、それは和辻哲郎という哲学者と鈴木正久というキリスト教の牧師です。この人たちと出会っていろいろと感化を受けたことが、知らず知らずの間に、その後の現在も含めて自分のありように影響を与えていると思います。

社会科学に関して関心を寄せるようになった原因は、成蹊高校に行ったのですが、そこに船越経三という先生がおられました。ご自身はアダム・スミスの研究家なのですが、その先生の授業が非常に熱意のあふれた「一般社会」だったので、それに興味を持ったことが、たぶん社会科学に進むきっかけ（の少なくとも一つ）になったのだろうと思います。

3 番目は、少し飛びますが、大学を出てからアメリカに留学しました。実は大学院は慶應に入っていたのですが、アメリカに行ったら大学院に入ってしまったので、慶應のほうは失礼しまして、カリフォルニア大学のバークレーで経済学科の大学院生になりました。

学資のためには、最初から Research Assistant になりました。後には Teaching Assistant になって、合計 4, 5 年アシスタントをやっていました。Teaching Assistant は、最初は経済原論を担当したのですが、これを外国人がやるのはものすごく大変なんです。例えば、アメリカ人の Teaching Assistant と並んで競争して採点をする、スピードではとてもかなわないですね。それから、アメリカの学生は文句を言いにくる。しかもたくさん来るので、採点が正しいとことをディフェンドしないといけなくて、それがすごく大変でした。ですから、途中から経済学部で教える統計学入門の Teaching Assistant に変わりました。そして、そのときにサウル・ハイマンズという若い先生、当時まだ Acting Assistant Professor だったと思いますが、その方の Teaching Assistant になりました。彼は後にミシガン大学に就職して、その経済学部の先生になられました。

ハイマンズさんの入門統計学の講義では、Teaching Assistant は毎回講義に出席しなくてはいけないということで、少なくとも最初の 1 年間は全部それを聞きました。それが素晴らしい講義だったのですが、その内容を全部消化して学生に教える。要するに、学生が実際に練習問題を解くわけですね。機械式卓上計算機がたくさん置いてある部屋があって、そこで学生と付き合う。それが仕事だったのですが、それを通じて、それまでは

疎遠だった統計学と親しくなって、統計学は大事な学問であること、特に社会科学にとって大事な学問であることを認識しました。

当時、カリフォルニア大学にはまだ若いジョルゲンソン先生がおられて、計量経済学の入門を習いました。これも、統計学に対する目が開かれた一つのきっかけだったと思います。

それから4番目に、カリフォルニアにいる間に実証経済学に出会いました。実は、バークレーの大学院に行ったときに、経済史家のヘンリー・ロソフスキー先生がおられ、彼もまだ Acting Assistant Professor か Acting Associate Professor だったかな。Teaching Assistant になる前には、彼の Research Assistant として大学院生活を始めたのです。そうしましたら、ロソフスキー先生は、大川一司先生との共著を書くプロジェクトが当時進行中だったんですね。その後、大川一司先生がおいでになりまして、1年ぐらいバークレーに滞在されて、ロソフスキー氏の Research Assistant は大川先生の Research Assistant でもあるという状況が生まれた。そういうわけで、大川先生の仕事を手伝って、大川先生といろいろお話をする機会に恵まれた。自分ではあまり自覚していなかったかもしれないけれども、実証経済学との縁がそこでできたと思います。それだけでなく、大川先生と出会ったことが、その後一橋大学の経済研究所に就職するという幸せな結びつきになりました。

大川先生が日本に帰られてから、当時一橋経研の所長だった都留重人先生に話されたんだと思います。たまたまぼくの父親は都留先生ときどきゴルフをご一緒したんですね。ぼくはゴルフをやらないので、おやじに「お前はだめだ、いくら教えてもうまくならない」と言われて、そのへんは落第だったのですが。

父は、大来佐武郎さんとか都留先生とか、ジャーナリストの方などと一緒にゴルフをやる会があって、都留先生がそこで間接的に僕のことを知られたことも、たぶん幸いしたんだろうと思います。それで、Ph.D. の準備が全部できて論文だけ残ったときに日本に帰ってきて、一橋の助手になり

ました。

さて5番目には、職業訓練研究会という集まりがありました。1970年代の中ごろだったか、当時の労働省職業訓練局の局長に石黒卓爾さんという方がおられ、ドイツと関連の深い方でしたが、局長の私的研究会をつくられた。その座長が大川先生の愛弟子の一人である梅村又次先生だったんですね。ぼくは労働経済学をやっていたので、それで呼ばれたのだと思います。その研究会に入れていただきました。

その研究会は、泉さん、ご存じかな。

原 泉さんは統計研究会の人でしょう。

尾高 統計研究会の事務局長だった和泉さんではありません。泉 輝孝さんという方がその研究会の世話係で、この方から職業訓練についてたくさん教えていただきました。この職業訓練研究会では、しょっちゅう実際の現場を視察しました。全国各地の職業訓練学校とか、工場の現場をたくさん訪問して、現場の人といろいろ質疑応答する機会が与えられた。現場を観察する、それから現場におられる方々と話をすることが大事だと知りました。要するに、観察の重要性を認識したということです。

実は、現場の探訪は今も続いていて、最近経営学部の松島 茂さんと「オーラル・ヒストリー」なるものをやっています。経営者や技術者とかいろいろな方をお訪ねして、「仕事の自分史」を語っていただき、速記録をつくっていますが、これも現場観察の機会を与えてくれていると思います。

6番目に、経済発展論（エコノミック・ディベロップメント）に対する関心をそそってくださった方が石川 滋先生でした。

ちなみに、大川先生も一橋大学を退かれてから、1年浪人したあとにIDCJ（International Deneloment Center of Japan, 国際開発センター）の理事になられて、研究や研修の担当になられたんですね。ぼくが勝手に思いますには、大川先生は日本に関する研究は全部やってしまわれて、あとはやる事がなくなって、自然と東アジアや東南アジア（もしかすると

インドを含むかもしれませんが)の研究をなさるようになったのではないかと思います。ともかく、大川先生も経済開発論に目を向けられ、IDCJで社会人を1年間預かって研修させるという事業を始められました。そこへ原さんも行っておられたでしょう。

原 そうです。いろいろありました(笑)。

尾高 そういうわけで、大川先生からもエコノミック・ディベロップメントに対する関心を奨励されたということがある。ですが、経済発展論に関する研究者としての目は、石川先生に教えられたところが非常に多い。

あの頃は、大学の給料だけでは足りなくて、原さんはどうだったか知りませんが、IDCJのアルバイトで社会人の相手をしたのは非常に助かりました。ときどき銀行の口座が底をつきかけて(笑)、IDCJから支えて貰ったのはとてもありがたかった。

靄見 それは一橋に行く前?

尾高 いや、一橋にいる間です。たぶん助教授だったころです。

靄見 一橋のほうが給料は安かったということ?

尾高 ええ、安かったです。

原 それはそうですよ(笑)。一橋の経済研究所にいる斎藤 修君が、私立のなかでは中の下であった慶應から移っても給料がかなり下がったというのをぼくは聞いています(笑)。彼は慶應から移ったので、ガクッと下がったと聞きました。

尾高 どのくらい下がったって?

原 年収で二百数十万下がったと言っていた。そういう記憶があります。

靄見 それって、斎藤 修?

原 うん。

尾高 それはいつごろですか。

原 斎藤君が一橋に移ったときですから、1980年代はじめだったはずですよ。

尾高 ぼくも、一橋大学の助手に採用されてずいぶんたってから、都留先生に、お前いくらもらっているかと訊かれて、「3万円」と言った覚えがあるんです。

薮見 3万円って、いつごろだろうか。

尾高 たぶん専任講師になったぐらいかな。そうしたら、都留先生が、「お前もう3万円になったか」とおっしゃった。

僕が日本に帰ってきたのが1967年。

原 昭和42年ですね。当時、上級職で国家公務員になると、月に2万いくらかいかないくらいですよ、22歳で。

尾高 大体合っていますね。実は、ぼくは大学からもらった給料袋をずっと取ってあってね（笑）。

薮見 偉い、すごい。これはすごい。

尾高 もっとも全部取ってあるとは言えないんだけど、そのうちエッセイでも書こうかなと思っています。

薮見 面白い。

尾高 その給料の話でいま思い出したのは、アメリカへは一橋から2回行ったんです。先ほど言ったように、Ph.D. の論文を書く寸前で帰ってきたので、書いて持っていくのに短期間行かせてもらって、その後1970年のはじめに2年間、国家公務員のままハーヴァードに行きました。

そのときにニクソン・ショックがあった。ハーヴァードからは給料をもらっていたんですよ。その給料があまり高なくて、毎月1,000ドルぐらいだった。ハーヴァードではスタッフの宿舎に入れてもらったんですよ。それなのに、1,000ドルでは旅行などをする余裕はあまりなかったことを覚えている。もっとも、東京でも給料をもらっていたわけ。ところが、行っている間にニクソン・ショックで日本の給料がボンと上がった。だから、その意味では、行くのが早すぎて損したとあとで思った（笑）。その当時は1ドル308円だったかな。

薮見 今は経済発展論の話でしたね？

尾高 石川先生に目を開かれた直接のきっかけは、清川雪彦君とぼくとは、大学院のゼミを石川先生と一緒にやったんです。共同ゼミ（ワークショップ）にして、毎週石川先生とお会いしていろいろ議論する機会があった。

その後も、石川先生は新しい芽を育てる機会をいろいろ与えてくださったのですが、その一つが、石川先生が関係していらした CAMS（Council for Asian Manpower Studies）という研究支援グループでした。もうなくなってしまいましたが、アジア労働力研究会議と訳していたと思います。そこの理事に日本人が一人ほしいからおっしゃって、加えてくださったんです。その本部がフィリピン大学にあって、ホセ・エンカナシオン（愛称ペペ）という数理経済学者がフィリピン大学の School of Economics の dean でもあり CAMS のリーダーでもあったんですね。そこへときどき顔を出すようになった。顔を出しているうちにお前もプロジェクトをやれということになりまして、東アジアと東南アジアの自動車部品工業の実態調査をやりました。

とにかく東南アジアとの接触点ができしたのは、石川先生とのつながりの一つの副産物。

原 すみません。そのときの原稿ですが、石川先生が退官された記念の『一橋論叢』に、たしか先生、どこかの……。

尾高 フィリピン。

原 フィリピンですか、機械修理の話だったように記憶しています。

尾高 はい。

原 今はこの号は手許にあります。

尾高 ああ、そうですか。

原 清川雪彦さんの満州への移民の論文もありますよね。

尾高 そうです。そのプロジェクトのとき、自動車工場とか自動車部品工場をあちこち見て歩いたほかに、共同研究のアジアの人たちの研究論文を全部読んで、尻押ししたり、催促したり、大変でしたけれども、自分の

ためにもなったと思います。

もう一つ、ごく最近ですが、ミャンマーの経済構造調整の手伝いをしたのも、石川先生が外務省に推薦して下さったことがきっかけになっていると思います。これは残念ながら、政策に応用されるには至っていませんが。

以上が6番目です。

最後に7番目には、経済史とつながった。これは、今のミャンマーの話よりもっと前なのですが、数量経済史の同人（QEH, Quantitative Economic History の略、数量経済史研究会）をつくる動きがありました。その動きを始めたのは西川俊作さんなんですけれども、その末席にぼくも加えていただいた。たぶん西川さんから話を聞かれた梅村先生がぼくを誘って下さったのがきっかけだったと思います。

そういうことで、エコノミストとヒストリアンが一緒になり、日本経済史が中心ですけれども、ときどきは西洋経済史とか東洋経済史の人たちと一緒に研究会をやったこともあります。そしていやがる日本経済新聞社を口説き落として（笑）、同人の論文集を4冊出した。そのあたりで、もうちょっとまとまった仕事をしようという話になって、それが1980年代の終わりから90年ぐらいに岩波書店から8巻で出た『岩波日本経済史』というシリーズになりました。

そういうわけで、以上の七つの点がぼくの研究者としての裾野を広げる役割をしてくれたかなと思います。

最後に、法政に来てから、今まであまり関係のなかった学部学生と付き合うようになった。薮見さんとか絵所さんとか（絵所さんは以前からミャンマー・プロジェクトでも一緒にしたけれども）の新しい同志が増えた。そして学部学生との交流は、研究とはまたちょっと違ったダイメンションで新しい世界を開いてくれたと思います。

2. なぜ労働経済なのか

霧見 ありがとうございます。尾高さんは非常に広い領域をカバーしていて、我々の関心からいうと聞きたいことがたくさんあるんですね。例えば、何で労働なのか。最初からエコノミストを目指したのか、それとも何で労働なのか。慶應時代なのか、それともバークレー時代なのか。そのへんからはじめましょう。

尾高 バークレーに行ったときは、もう労働に決めていました。

霧見 決めていましたか。

尾高 はい。何で労働なのかというと、たぶんそれはおやじの影響ですね。

原 ぼくもそうかなと実は考えていた。

尾高 ぼくの父親は尾高邦雄と言いまして、東大の社会学にいました。彼は産業社会学をやっていて、人間関係の本があります。『産業における人間関係の科学』だったかな。

これは、自分で考えると一寸癪ですけれども。

原 まあ、そんなもんですよ（笑）。

尾高 実は大学へ進むときに、東大を2回受けたんですよ。東大を2回落っこちて、それで慶應に行った。東大を受けたとき、今は文……。

原 今は文Ⅲですね。

尾高 当時は文Ⅱだったのかな、文学部に入って社会心理学をやりたいなと思った。

霧見 社会心理学をやりたいかったの。

尾高 ええ。でも今から考えると、入れなくてよかったと思うんですよ。というのは、社会心理学をやるということになる和社会学科に入ることになって、父親と同じ専攻になる、それははなはだよくなかった。よくなかったという意味は、知的な発達のためにはいろいろプラスもあるかも

しれないけれども、マイナスもあったのではないかと思います。幅が固定されるとか、いろいろと。

ともかく、社会心理学をやりたいなと思っていた。ところが、そういうわけで慶應に入ったでしょう。しかも、慶應も補欠で入った。

原 ぼくも尾高さんのメモ（前掲「研究生生活40年」）を見て、ええって思っ（笑）。

尾高 しかも、二次補欠だったんですよ。でもまあ、とにかく入ればいいやと思って（笑）、入学金を納めて入りました。

慶應を受けることにしたとき、慶應に入るなら理財だろう、経済に入るかなと思って、それで経済にしたんですね。それで、社会心理学に近いものを学びたいのなら労働経済学だということになった。そこもおやじの影響があって、おやじが話を聞いて、経済学で人間関係とか組織とかをやりたいのなら藤林敬三先生がいいんじゃないかと言ったんですね。それで藤林先生を選んだ。

でも、慶應に入ったとき、うれしかったです。

靄見 どうしてですか。

尾高 だって、それで浪人生活にピリオドが打てた（笑）。二次補欠だったんだけど、卒業するときに銀時計をもらったから、まあ、いいかなと。でも、銀時計も少しインチキではなかったかと思うのは、全優ではなかったんですからね。

靄見 全優でなくなたって、あれは比率で出しているんでしょう。だから、一つか二つぐらい優でなくともいいんでしょう。

尾高 いいんですかね。しかも、慶應では、卒業式の前にアメリカに行っちゃったんです。

原 卒業式は出席されていない？

尾高 しなかった。藤林先生に相談に行ったら、卒業式は、出席する権利はあるけれども、義務ではないって（笑）。

靄見 藤林先生の言いそうなこと。

尾高 「行きたまえ」とおっしゃったので、行っちゃったんですよ。ところが、自分の仲間には一切そういうことが伝わっていなかったものだから、卒業式のときにぼくの名前が呼ばれてね。そんなこと、自分では思っていなかったですからね。

靄見 そうか。優秀生のなかで呼ばれたということ？ 全然連絡なかったんですか。

尾高 いや、どうなんでしょうね。ともかくぼくは知らなくて、それで友達がえらく心配をしてくれました。とにかく卒業式では名前を呼ばれたけれども、出て行かなかった。銀時計と表彰状とはあとで届けてもらいましたけれどもね。

ともかく、労働経済だと決めていたんですね。それがよかったか悪かったかはわかりませんが。大学院に入ったときも、慶應の経済学を出たから経済学が当然と思っていた、しかももう労働経済学に決めていたからそれが当然と思っていたんだけれども、今から考えると必ずしもそう考える必要はなくて、大学院に入るときに方向転換してもよかったのかもしれない。

3. 「マル経」と「近経」

靄見 このメモだと、慶應のときの話がちょっと出ていますでしょう。例えば、井村喜代子さんの話だとか、それからマルクスの話だとか、現代経済学も少し読んだけれども、そんなに懇切でいいいではなかったという話で、こういうものというのは尾高さんのなかにどうやって生きているのか。全然影響はないのかなと。

というのは何を言っているかというと、ときどき尾高さんと話していて、山田盛太郎の話が出るでしょう。最近も出ますよね。慶應でここに出てくる人たちは、かなりそういうのに近い人たちで、そのときにちょっと触れたことが何となく尾高さんに影響しているのかなというふうに……。

尾高 それは、むしろぼくが伺いたいですね。外から見えていらして、どうお思いですか。

霧見 逆にいうと、山盛をどう評価するかということなんですけれども、最近のアジアの、この間先生から出た、誰でしたっけ、フランス人の。

尾高 ああ、ジャン・パスカル・バッシーノさん。

霧見 バッシーノの話をして、その話で、意外と日本の経済発展というのはレベルが低かったと。

尾高 イギリスやドイツ以下だった。

原 「インド以下的」だということでしょう。

霧見 それで山盛という話も出てくるでしょう。そのときに、最初に何となく先生の『労働市場分析』を読んでいても、突端のところで山盛の話が出てきますでしょう。

尾高 そうでしたかね。

霧見 うん、出るんですよ。ストレートに結びついているとは思わないんですけども、二重構造を議論するときに、山盛を意識していますよね。ちらっと、講座派の議論みたいなものを意識しているのかなと思ったりしているんですが。

尾高 嶋田君には、どのように見えますか。つまり、マルクス経済学と近代経済学といわれる二つの潮流が今まであったでしょう。その二つの潮流は、ぼくのなかに生きているのか、生きていないのか。どう感じておられますか。

嶋田 わかりませんけれども、私が学生のころ、まだ先生は研究所にいらっしゃって、先生の出された本、忘れちゃけれども、いくつか読ませていただいて、私はもともと社会学部というところでマルクスというので少し読んでみたりして、いや、そっちに近いのかなと。

尾高 ああ、そうですか。

嶋田 直観的ですよ。私は深くは全然読んでいないんですけども。だけれど、いわゆる近経というところにもかなり深く入っておられるような気

がして、何かすごくいい感じなのかなと、学生ながら思った記憶はありません。

原 近経、マル経というのは、セクト争いみたいになっていたのではないですかね。やや乱暴に言う。近経、マル経いずれを問わず、西欧の経済学の輸入を脱して、日本の経済の問題に実証的にとりくみはじめたのが山田盛太郎だったのではないのでしょうか。

だから、「マルクス経済学なのか」「近代経済学なのか」というカッコ付きの対立ではなくて、日本経済の歴史や事実に対する興味があった人は、みんな山田盛太郎を読んでいますよ。ぼくも、もともとは農業経済出身ですから、熟読しました。ただし、あまりよくわからなかったですが。

やはり尾高さんが一橋に行かれて、例えば大川先生は農業経済でしょう。梅村先生もそうでしょう、もともと。この両先生も事実や歴史に対する興味がその研究の基盤であったと思います。石川先生も同じでしょう。確か石川先生はもともと新聞記者か何かちょっとやられていて。

尾高 そう、香港におられてね。

原 これらの先生には、はじめから具体的なことを見るという発想があったんです。つまり、イデオロギーというところとちょっとややこしいですけども、分析の理論の枠組が先行するタイプの「経済学者」と、必ずしもそうでない人といるとしたら、たぶん尾高さんも大川先生と同じように後者のほうではないか。

そしてこのような実証の原点に山田盛太郎がいるのでは。

鶴見 原点というのは？

原 原点とは、いわば「はじめ」の人という意味で、何となく枕言葉としてでも山田盛太郎とか、いわざるを得ないところがあるんですよ。それがいいかどうかは別です。

そのあと、労農派との論争といった格好になっていきますけれども、やはりいわゆる「歴史研究」というのか実証分析というのか、そういった研究が日本の場合に山田盛太郎あたりからスタートしたということがあるの

ではないかという気がぼくはしているんですけどもね。

霧見 どうですか。

尾高 理論的な側面で言うと、ぼくは最初からマルクス経済学に入りたいとは思っていませんでした。何となく違和感があったので。でも、慶応では「マル経」系の理論家の話も一所懸命聞きました。最初に1年のときのサブゼミ、あれは必修だったのかしら、わからないけれども、サブゼミを担当してくださったのが黒川俊雄先生だったんです。

黒川先生はチャキチャキのマルクス経済学派なんですね。そこで読まれたのが舞出長五郎の『経済学説史』。あれはどこまで書いてあったかな。ミルまで書いてあったかしら。とにかく、『経済学説史』とはいうんだけど、リカードかミルで終わっているんですよ。それを読まされて、最後にレポートを提出したんだけど、評価にはBを喰らったのね(笑)。それがマルクス経済学に対する嫌悪感になったとか、そういうことでは全然ないんですよ。だけど、「Bを食らっちゃった」と言ったら、誰かがそれを先生に告げたんですね。それであとで黒川先生にお会いしたときに、「お前はBを喰らったと言ったそうだな」と言われちゃって(笑)。

もともとぼくは理論に強いとは思わないし、理論家を狙ったことは一度もないんですけども、理論の動きには関心があったとみえます。マルクス派では、あの頃の慶應には遊部久蔵先生がおられた。この方は学説史ですね。井村喜代子さんは遊部さんのあとを引き継いだんじゃないですか。井村さんはチャキチャキのマルクス経済学者だし、ほかにもその系統の方がたくさんおられましたね。あと井村さんと結婚した北原 勇さんとか、寺尾 誠さんとか。小池基之先生には農業経済論を習った。小池先生は講座派ですね、東大でも講義をしていらした。

有名な日本史の野村兼太郎大先生がおられました。野村先生はマルクス経済学者ではないけれども、その下におられた日本経済思想史担当の島崎敏夫先生もマル経だったですね。ともかく、そういう方がたくさんおられて話を聞いたりしたけれども、でもマル経の講義を進んでとったのは小池

さんぐらいかな。どちらかというとな経の話を知っていましたね。たとえば福岡正夫先生の経済理論の特別講義を知って、これには大変感心しました。福岡先生は、手ぶらで教場へ来られて非常にいい講義をされた。ただ、しょっちゅう「私の先生のサミュエルソンは」とおっしゃる（笑）。

実は、後にアメリカへ留学することを決めたときに、必要な推薦状は福岡先生に書いていただきました。そうしたら、自分で推薦状を書いてきたらそれにサインしてやるとおっしゃって（笑）、困ったけれども「書いてきました」と言って持っていったら即座に署名してくださった。ということで、福岡先生にはお世話になりました。

いずれにしても、理論の側面では、最初からマルクス経済学は選択していませんでした。だけど、当時は、労働経済学の実証面での業績というとなマルクス経済学の伝統の人のものしかなかった。だから、啓発されたのは、そういう意味でマル経の伝統のなかで出版されたたぐいさんの実証的研究でした。たとえば、当時で言うと、大河内一男先生。影響を受けたなかでは私が一番好きだったのは隅谷三喜男先生でしたね。隅谷さんの『日本賃労働史論』がまだ出ないころで、そのもとになった論文が東大の『経済学論集』に載っていたのを大変フレッシュな感じをもって読みました。

あといろいろありましたね。兵藤 釗さんとかね。兵藤さんの本『日本における労資関係の展開』にもすごく感心して、一人で先生に会いにいきました。あと、氏原正治郎さんとかね。

大川先生と話をしても、大川先生ご自身はかなり労農派的ではないかと思ったことがあります。

原 いや、ぼくも「先生、どちらですか」って。「いや、原君、ぼくはどっちだと思う」、「いや、先生は講座派に近いんじゃないですか」。「そうかな」って（笑）。そんな話、ぼくは飛行機のなかで何度かしたことがあります。

尾高 大内 力の『日本経済論』というのがあるでしょう。ぼくは、薄っぺらい『日本経済論』というのを、すごく感心して読みました。

鷺見 薄っぺらいのって、知らないな。上下の厚い『日本経済論』ではなくて？

尾高 それは今でもありますね。

原 1947年か48年ころに出版された『日本資本主義の農業問題』があります。

尾高 薄っぺらい書物があって、それがかみそりの刃のように切れて、論理明快で、すごく感心しました。

鷺見 小宮（隆太郎）さんが反論して、一生懸命書かれたのは『日本経済論』で、たぶん『エコノミスト』に啓発されてやっていましたけれどもね。

尾高 そういう関係で、山田盛太郎も「読んだ」というよりは「知っている」程度です。

鷺見 安場さんの山盛をモデルにしたのがあるでしょう。あれはいつごろ出たんでしたっけ。

原 何だろう、安場さんの。

鷺見 安場さんの講座派の理論を……。

原 “Anatomy of Japanese Capitalism” ですか。

尾高 わりに最近のものじゃないの？

鷺見 ずっと昔の論文で。

原 確か1970年代なかごろでなかったかと記憶していますが、安場さんは“Anatomy of Japanese Capitalism”で、労農派と講座派の違いをきれいにしてモデル化しています。そのエッセンスは安場さんの『経済成長論』に、紹介されています。

尾高 なるほど。では、最初に書かれたのはもっと前。

原 70年代の頭かな。そのへんではないかと思います。

尾高 コウゾウ・ヤママラが日本のマルクス主義論争について書いているのとタイアップしているのではないですか。それとはまた別ですか。

原 そこはよくわかりません。

霧見 でも、単発の論文で。

原 単発の論文で出たんですよ。ぼくが知っているのは。

霧見 ぼくもそれを読んで、こういうふうにモデルができるんだと思って、すごく感心したことがありましたけれども。

尾高 でも、安場さんは両方とも評価しないわけでしょう？

原 基本的には両方とも評価しない。

霧見 でも、講座派などマルクス系に対して理解をもっていると、すごく感心したことがあります。

尾高 ぼくも、自分でそれほど理解しているとは思わないのですが、尊敬はしていましたね。

霧見 誰を？

尾高 講座派と労農派との両方を含め、実証研究をやったということは非常に高く評価すべきだと思います。

原 個人的な私的な会話ですけれども、大川先生も同じことを言われていました。理論の体系は違って議論としては賛成ではないにしても、マルクス学派の仕事に大川先生は興味をもたれていたことは間違いない。

尾高 大川先生は東畑精一先生の弟子でしょう。マルクス系のいろいろな文献をゼミで一緒に読んで、マルクス経済理論の部分に反発した、その趣旨のことを学友に言ったとぼくにも言っていたらっしゃいましたね。

原 だから、結局はあのときの東畑先生は農業経済のほうですけども、経済学部も兼任されたりして、お弟子さんはずいぶんマルキシストが多いし。

尾高 習われましたか。

原 いや、ぼくは直接に習ってはいません。東畑先生は、学派を問わず、きちんとやるやつはいいんだという発想だったようです。だから、大内 力さんがどこかに書いていますが、私は先生というのは二人しかいない。大塚久雄と東畑先生だって。それで、宇野弘蔵は微妙だというようなことを書かれたことがあるんです（笑）。

尾高 東畑先生の書物は、あまりマルクスのでないのではありませんか。

原 先生自体はマルキシストではないですよ。『日本農業の展開過程』という主著は、シュンペーターの経済動学の枠組みで書かれています。

尾高 あと、マルクスとのつながりということでは、都留先生もあるんですよ。

原 都留先生は、マルクス経済学者、マルキシストだという説がある(笑)。

尾高 都留先生は、ぼくが何をやろうと自由にさせていただきましたけれども、『都留重人著作集』が講談社から出たときには、編集委員の一人に任命されました。何をやったかという、先生が英語で書かれた論文を1冊にまとめた。もっとも、ぼくがまとめたというよりは、先生がご自分でこれとこれとこれとおっしゃって、それらをまとめて解説を書いた程度ですけれどね。

そのときに都留先生のご著作をあらためてまとめて読んで、都留先生はサミュエルソンを訳しておられるし「近代経済学」をよくご存じだけでも、エッセンスはマルクス経済学者なんだと認識しました。

原 たしか、マルクスの再生産表式の最定式化を試みた論文を都留さんが書かれたことがありますよね。

尾高 ついでに思い出したのは、都留先生を囲む研究会があって、あの頃一橋で生産性インフレ論を展開された……。

霧見 伊東光晴さんではなくて？

尾高 高須賀義博さんが音頭をとられて、都留先生の薫陶を受けた方々、たとえば宮崎義一さんとか伊東光晴さんとかから始まるたくさんの方々から成る研究会がありました。そこへお前も来いと言われて、会が続いている間は何回か出ました。その成果も論文集になって勁草書房から出ています。ぼくもそのなかにコメントを書かされたりして……。

霧見 それは『新しい政治経済学求めて』。

尾高 ええ。何冊か出ています。勁草書房の店主だった井村寿二さんが

都留さんのことを尊敬しておられたので便宜を図ってくれたのだと思います。井村さんというのは、井村喜代子先生のお兄さんだったかな。いろいろなつながりがありました。

そういうわけで、マルクス経済学には関心があった。ぼくは、一時は、マルクス主義に対して一種の恐怖感みたいなものがあったんですね。

霧見 恐怖感を持ち続けていた？

尾高 持っていましたね、学生のころは。ところが、井村先生がサブゼミで『資本論』の1巻か2巻かを一緒に読んでくださったので、その恐怖感が解消された。それはすごく感謝しています。

嶋田 君は、誰が先生でしたっけ。

嶋田 最初はまさに絵所先生と仲のよかったインド経済の古賀正則先生という人で、経済研究所時代は寺西先生のゼミで、三重野（文晴）と一緒に出ていたんですけれども、ただぼくはずっと社会学研究科だったので、なぜか金融のところにも出ていたという感じで。

尾高 学部は？

嶋田 学部はずっと社会学部なんです。

尾高 学部のときの先生は？

嶋田 ゼミはその古賀先生で。

尾高 大学院になってから、古賀さんは辞められた。

嶋田 そうなんです。ただ、ぼくと一緒に去ったので、いちおう古賀ゼミということでやっているんですが、寺西先生が発展論というか、金融の発展をやられていたので、三重野と一緒に出ていて。

尾高 大学の前は？

嶋田 高校は別に、札幌北高校というところで。

尾高 札幌なの？

嶋田 ええ。それで私も何か変わっていて、北大に1年いて、やめちゃっているんです。それで浪人して、2浪計算で一橋に入ってきて、それで……。

尾高 何で北大をやめたの？

嶋田 たいした理由はなくて、ちょっと北海道を出たかった（笑）。

尾高 北大のほうが難しいんじゃないですか。

嶋田 いえいえ、偏差値はもちろん一橋のほうが上ですけどもね。ただ、北高とか南高というのはみんな北大に行ってしまうので、たまに出てみようかなという……。

靄見 一橋にいたんですか。

嶋田 そうです。面識はなかったんですけども、先生はまだいらっしやったんです。

靄見 何年ぐらいにですか。

尾高 三重野君と同期。

嶋田 実は私、法政で非常勤を三重野の代わりに、2002年にやっていたんです（笑）。2部ですけども、現代アジア経済論で。

尾高 それは知りませんでした。

嶋田 恥ずかしいので、あまり言わなかったんです。

尾高 法政の非常勤講師って、月給はいくらですか。

嶋田 本当は3万いくらだったんですけども、私は公務員扱いなので辞退させられて、ただでずっとやっていたんですよ。

尾高 そういうことがあったんですか。

靄見 辞退しているんですよ、官僚の不祥事があってから。

尾高 辞退させられたって、誰がさせたんですか。

靄見 役所が。

原 大学の教師は国家公務員でもいいんですけども、JICAとか特殊法人の職員は、非常勤で出ても基本的には辞退していたんです。もうそういうふうになっていたんです。

靄見 不祥事以降ですよ。

尾高 本人は不祥事と関係ないじゃないですか。

原 いや、そうなんですけれども、そうなっちゃったんです。

霧見 お金の出入りはあまりしないようにと、そういうことでしょうね。

原 それで、夜だといいとか、土日はいいいとか、そんなことを……。

嶋田 よかったんですけども、どうもうちは固くて。

原 JICA の問題ですよ。

霧見 内部の問題。

嶋田 内部で辞退させられて、今でも紙が残っています、辞退しますって（笑）。

尾高 霧見さんは一度、彼をおごらないといけませんね（笑）。

霧見 本当にそうだね（笑）。

尾高 インド研究をやっていたんでしょう？

嶋田 大昔ですけども、もうあまり関係ないです。

霧見 JICA はどこに？

嶋田 JICA はずっとインドシナ方面です。

霧見 それでまた関係があるんだ。

尾高 嶋田君は、最初からではないけれども、ミャンマーの経済構造調整プロジェクトを担当してくださって、一緒に行ったり来たりしたんです。

4. 一橋大学経済研究所の共同研究

霧見 あのあと経研に行きますでしょう。尾高さんが入った経研というのは、世代から言うと、創立者の世代の次の世代？

原 いや、まだそうでしょう。

尾高 誰を創立者というかによりますね。

霧見 東亜経済研究所の流れがあるでしょう。

尾高 そうですね。東亜経済研究所を創立したのは誰かな。上田貞次郎かな。

靄見 あれは昭和何年ですか。

尾高 18年。もっと前かな。

原 もっと前だと思います。ぼくのいる東文研は昭和16年に設立されます。東亜のほうが早いはずなんです。ちょっと早いはずなんです。忘れましたが。

尾高 でも、最初は国立ではなかったんですよ。

原 そうです。

尾高 私立だった。それをどこからか国立にしてもらったんです。してもらったんだか、してくれたのか。要するに政府が、アジア経済を研究させて、間接的にはあっても戦争のために役立てようということだったと思います。

当時のスタッフは、山田 勇先生を含めて、かなり何度も東南アジアに行かれて調査をした。板垣先生もそうですね。

原 板垣与一先生ですね。

尾高 板垣先生はなぜかぼくにも目をかけてくださって、直接お教えいただいたことはないんですけども、父の葬儀にもおいでくださってびっくりしました。二人はどこかで知合いだったんじゃないかと思います。

原 よくわからないけれども、関係していたのかも（笑）。

尾高 それで思い出したけれども、父は東大の助手だったころに、駿河台あたりの社会科学研究所なるものに連なっていました。そのころ、馬場啓之助先生を含む若い学者の方々と一緒にいろいろわいわいがやがややっただと思います。馬場先生は学説史の先生で、一橋の学長代理もなさいました。当時は、「社会」といえば社会主義と結びついていると思われたらしくてうちのおやじにもいられたみたいですが、たぶん板垣先生ともそういうつながりがあったんだと思います。

靄見 それを母体にしてできるでしょう。まだ、ある意味では草創期ですよ。そのへんの話をいろいろ聞きたいな。

尾高 東亜経済研究所は、そういう経緯があっで出来た研究所だから、

戦争が終わったときには自粛して、当時のスタッフのクビを切って、新しく入れ替えたんですね。そのとき誰が学長だったのかな。中山伊知郎先生だったのではないかと思います。

そのときまで、大塚金之助先生もおられたんですよ。

霧見 彼がその研究所の？

尾高 大塚先生は東京商科大学のスタッフだったけれども、研究所も兼任しておられたのではないかと思います。ともかく、そういうスタッフが全部一度辞めて、それで再出発したんですね。

都留先生は、再編成をする前から東亜経済研究所に出入りしていらした。先生は、戦争が始まってからもアメリカにおられたんです。ハーヴァードにおられて、終戦前に引揚船で送還させられたのね。帰ってこられてからは政府関係の仕事をしておられたんだと思いますけれども、どういう因縁からか、東京商科大学の東亜経済研究所の嘱託研究員か何かだったんです。

再出発直後の所長は、たぶん学長が兼任したんですが、初代の専任所長は都留先生だったんです。そのとき先生は、ずいぶん永く所長を務められたと思うんです。岩波書店との関係も都留先生のおかげでできた。雑誌『経済研究』が岩波書店から出ているのも、経済研究所の和文叢書が岩波から出ているのも、都留先生のおかげです。

原 ぼくは大川先生から、いま尾高さんが言われたようなことを雑談風に聞いているんです。大川先生は宇都宮高等農林の先生だったですよ。それで、経済安定本部ができたとき、そちらに移られた。戦後の為替レート360円を決めるとき、大川先生はその作業に関わっています。そのことを書いた「単一為替レートと日本農業」という論文があるんですよ。そこでは大川先生は均衡レートは300円くらいだという結論を出されています。その後、たしか都留さんから一橋に来ないかと声がかかったといわれてました。だから大川先生もかなり早いときからいるんだと思いますよ。

尾高 そうですね。

原　そして、大川先生が自分の弟子筋にあたった梅村又次先生を引っ張っていくんですね。

尾高　そうです。梅村又次先生は労働省におられたんです。

原　そうです。

尾高　だから都留先生は、創立者ではないけれども初代の専任所長で、最初のスタッフは大体先生が決められた感じです。一人で決められたかどうかは別として。

　　ぼくが入った当時は、まだ大体みなさんいらっしゃいましたよ。高橋長太郎先生とかね。あと大野精三郎先生（この方は経済学説史ですね）とか、統計学者の伊大知良太郎先生とか、東亜経済のころからの山田 勇先生とか。

原　石川先生はちょっとあとなんですよ。

尾高　石川 滋先生はちょっとあとですね。

靄見　石川さんはどこから来たんですか。

原　あれは新聞社か通信社だったか。

靄見　新聞社からですね。

尾高　初代からの方々はたぶん最初から教授で任用されたんじゃないかな。石川先生はたしか最初は助教授でしたよ。篠原先三代平先生も初め助教授でした。

原　いま完全に失念していますが、実は斎藤 修君が所長のときの経済研究所の外部評価委員をさせられていろいろヒアリングをしたんですけれども（笑）、細かい歴史は忘れちゃって。

靄見　一応聞いているんだ。

原　だけど、忘れました（笑）。

靄見　そうすると、最初にそういう人を上で採って、それで助手で尾高さんは行ったんです。

尾高　そうですね。

靄見　清川さんというのは、もっとあとでしょう。

尾高 そうです。

原 清川さんはあとです。

霧見 助手で採った最初が尾高さんということ？

尾高 いや、そんなことはありません。ぼくが採られるころまでの一橋では、最初は必ず助手でした。今はそういうことはないと思いますが。

助手は、国立大学の問題点の一つでした。ポストが足りないから、助手を事務官に充てたり、上につながらない助手がいたりした。事務助手とか、コンピュータ助手とかいう人たちは、研究スタッフに昇進しない助手、万年助手のわけです。これは研究所でも学部でも火種の一つで、大学紛争の原因はそういうところにもあったと思います。

原 今は少し変わっていますし、それは東大も一緒だったんですからね。ただ、今は助手ポストが減ってしまってます。大部門制への移行に際して、教授ポストを増やすために助手ポストを吸い上げてしまいましたから。東文研でも助手は数人いますが、実はポストは一つしかないんです。それは助教授ポストの空きポストを使って、ある年度で回転させるというようなことでやる。そういう運用でしかやれない。

尾高 当時は、二種類の助手がいました。一種類は上につながっていて、もう一種類は最初から天井がついていた。その区別は、本人も知っているわけです。上にあがる助手は、任用のときにちゃんと（ちゃんとというのはおかしいけれども）研究の業績審査をして入れる。そして問題がなければ、専任講師とか助教授にあげるというふうになっていました。

それで、清川君はたぶん助手でなくて、専任講師から。

原 専任講師から始まった。たしか清川さんはそうです。寺西さんは？

尾高 寺西君もたぶんそうですね。

原 たぶん、あのへんからそうなんですよね。たぶん寺西、清川は同じ年だし。

霧見 10年ぐらいあとですよ。10年ならないか。

原 10年はいかない。

尾高 彼らは今年定年だから、7年です。

清川君が最初に任用になったときに、廊下で会って、彼はあいさつをした。強気の人だなあと思いました（笑）。

原 全く同感です（笑）。

尾高 しばらくしてから、君の給料はいくらだと聞いたらあまり差がなくて、「あまり差がないね」と言ったら、「差がなくて悪いですか」って（笑）。

原 少し話題をかえますが、「長期経済統計（Estimates of Long-term Economic Statistics of Japan since 1868, 略称 LTES；14巻の統計シリーズ，東洋経済新報社刊）」は、もう先生が入ったときにはとくに始まっていたわけね。

尾高 そうです。あれには全然関係していません。

薮見 大川さんの助手で手伝いをしていましたね。

尾高 あのときは、助手は LTES とは関係ありませんでした。

薮見 関係なくてね。

尾高 大川先生は、アメリカでお会いした間に、ペティ＝クラークの法則に関する論文を書かれた。経済発展とともに、まず一次産業が減って、二次産業が増えて、それから三次産業が増えるというのだけれども、でももっと昔にいくとサービス産業の比率が高いという議論でした。その統計的裏付けとか、そういうお手伝いをしたのを覚えています。

原 でも外部から見ていると、やはり一橋の経済研究所というと LTES が真っ先にパッと出ますよね。

尾高 そうですね。

原 だから、ある意味では長期経済統計は本当に国際的な知的公共財みたいなになっていますよね。

尾高 いや、「ある意味」ではなくて、そう言っていていいと思います。間違っているところもあるってということだけれども（笑）。

原 間違っているところがあるかどうか知りませんが（笑）、ああいう

仕事を続けられたのは、一橋の経済研究所という組織なのか、大川先生とか、そのまわりの何人か初代グループとか、どっちだったのでしょうか。大川先生の個性が強かったのではないかと、リーダーシップが強かったのではないかという気がしますけれどもね。

尾高 そうとらえていいと思います。あれはもともと仲間うちでは「ロック」と言っていたんです。ロックというのは、ロックフェラーのロックなんです。

詳しい経緯は知りませんが、最初は大川先生が中心になって、ロックフェラー財団から助成をもらって始まったプロジェクトなんですね。なかにはいる者から見ていると、大川先生のプロジェクトでした。

原 やはりそうでしょうね。大川プロジェクトなんでしょうね。

尾高 研究所が公的に組織したプロジェクトではありませんでした。

薮見 違うんですか。

尾高 みんな敬意をもっていたとは思いますが、研究所としてのプロジェクトではなかった。

薮見 研究所自身はプロジェクトで動いているんですか。それとも、どういう……。

尾高 ぼくが入った当時は、研究所の組織はマトリックス状になっていて、理論と地域との二つの軸から構成されていた。その両方に所属するというのが建前でした。みんな必ずしも守っていなかったけれど。

原 東文研も、地域と理論ともマトリックスを標榜していますが、実際はそうになっていない、穴だらけ（笑）。

尾高 ぼくはどうなっていたかな。ぼくの場合は、経済研究所が新しく国際経済機構という部門を文部省から取ったんです。忖度するに、当時OECDに加盟したのかな。そういうこととの関係で予算が付いたんじゃないでしょうか。それで、早くポストを埋める必要があったので、ぼくを採用したのだと思うんです。

ぼくは国際経済機構というのがいやで……。

原 ああ、そうか（笑）。

尾高 ILOとかFAOとか（JICAもそうかもしれない）、そういうオーガニゼーションを研究するという建前です。入ってからしばらくたって、（ぼくが予算編成などに関係するようになってからですから、ずいぶんあとですけれども）国際経済機構を文部省に概算要求したときの説明書を読みました。ずいぶんいいかげんな……。

原 それはそうですよ（笑）。

尾高 いいかげんな概算要求書だと思った。こんなのでは、今ではとても通らないと思いましたよ。でも、その時は通っちゃった。

原 昔は、偉い先生と文部省の上でパツと決めていて、あとは書類だけ。今はそんなことできませんよ。

尾高 それがよいこと気持の上で負担になっていたのですが、大学院に関係するようになってから、その「機構」というのはやめましようと言って、「国際経済」にした。

原 今の話の延長線上で、これも尾高さんだからざっくばらんに聞きたいんですが、COEプロジェクトではじまったアジアの長期経済統計の成果はどうなってますか。

尾高 それはもっとあとの話です。

原 LTESの話が出たからそれと関連して聞いたのです。台湾については成果がそろそろ出ると、たしかそうですね。

尾高 COEというのは、今からちょうど十年くらい前に、当時の文部省、今の文部科学省が、Center of Excellenceなるものをつくろうと考えた。COE、「中核的研究拠点」になるべき共同研究を募集したのです。結果的には大型の科研（科学研究費補助金）になってしまったんですけども、最初はそうではなかった。その当時、たまたま僕は所長だった。

文部省は、今でもそうだけれども、突然決めたんです。とにかく、下にいるぼくらには突然決めたというふうに映った。突然であまり準備期間はなかったんだけれども、これはとにかく手を挙げて元気のあるところを見

せようと思ったんですよ。

手を挙げてしまってから、何をやろうかとみんなの意見を聞いたら、ぼくの記憶では寺西重郎君がアジアの長期経済統計をやったと言った。そのアイデアをいただいて、あとは作文をして、それで申請書を出したんです。

そうしたら、研究所長会議が東文研であった。

原 所長は濱下武志君かな。

尾高 誰だったか、忘れちゃった。

原 ぼくがそのあとなので、ぼくは尾高先生と会っていませんので、たぶん濱下君かもしれない。

尾高 所長会議で東文研にいたんですよ。東文研に文部省から通知がきて、採択したという（笑）。

あとから考えると、文部省は社会科学も一つ入れておかないといけないと思って、五つぐらい通したなかのいちばん最後にくっつけてくれたんだと思うんです。その後の社会・人文系のCOEよりもはるかに少ない予算でしたが、とにかく第1回のCOEに選ばれた。

薮見 そのときは予算も少なかったですか。

尾高 年間1億円。

原 1億円、そんなものだ。

尾高 それをともかく最初に……。

原 とにかく一橋が最初なんです。

薮見 東文研には来なかった？

原 東文研はいくら出しても落ちていた（笑）。まだ、だめです。

尾高 一橋はすべてについて、ほかのところはよく知りませんから個人的に感じているだけですけれども、とにかく非常にまじめにやりましたね。お金の使い方も非常にまじめにやった。

ところが、科学研究費と同じで、9月ぐらいになってからお金に来るわけです。それを半年間で使えっていうので困ってね。マイクロフィルムな

どを撮りまくったら、今度は足りなくなって（笑）、大変でした。

でも、何でアジアの長期経済統計研究が選ばれたかという、やはり大川先生の伝統があったからでしょう。

原 それなんです。やはりそれがあったからだ。

尾高 LTES のアジア・バージョンをつくったらということだったんです。だから、そういう意味では自然につながっていて、大川先生のプロジェクトは研究所として組織したわけではなかったけれども、今度のアジア長期統計は、機関としてやることにしたプロジェクトです。でも、スタッフ全員が参加していたわけではないんです。

薮見 今回のね。

原 もちろんそうです。ぼくの印象だと、それこそ外部評価のときにもありますように、半分弱ですね。

尾高 そうです。半分までもいっていない。あとは、学外の方々に参加をお願いしました。でも、結局4年では完成しないから、次世代の「21世紀 COE」に引き継いでもらった。それでも、それが終わるまでに全部は完成できないと思います。

原 ぼくがあえてこの話をしたのは、データを集めることが大変だということと同時に、国民所得をつくるときには、価格体系をどうするのかとか、特に固定価格表示のシリーズを作成するには、基準年をどうとるのかといった大きな難問がありますよね。いつか大川先生から「原君はLTESで1930年代の価格を基準年にした理由がわかるかね」と質問された記憶があります。

尾高 ああ、そうですか。

原 僕には答えられませんでした。

尾高 1934年、35年をベースに……。

原 そうです。だから、あの選定とか、そうすると当然例えば価格の相対価格が変わってしまうと全然違う話になってきますから、特に固定価格での所得推計の場合は、日本経済がどういう発展パターンをたどったの

か、それなりの分析というか、結局仮説がないと実はデータもできないはずですね。

アジア諸国の長期統計の場合にも、農業とかいろいろなセクター、いろいろな国があるから、なかなか国民所得をつくるというのは難しいかなと、ぼくは寺西さんとよくそんな話をしていたのを記憶しています。LTES というか実証経済分析というか、いずれにせよデータをつくっていく作業は、単なるデータ作りではないんですよね。

霧見 そうでしょね。

原 理論と実証とのインタラクションというのが大切だといった話を大川先生がよくされていましたから。だから、経済発展をどう考えるのかといった場合も、やはりそういう問題が絡んできますよね。

尾高 そうですね。だけど、それほどちゃんとやってはいないです。

原 いないと思いますよ。もちろんそうです（笑）。

尾高 「ちゃんとやって」という意味は、実証のためのデータを集めるのと理論との間を行ったり来たりしながら議論して、方針を出して、それではこう行こうと、そういうふうにはなかなかないですね。もっと場当たりのです。

原 いつだったか忘れましたが、梅村又次先生から、某大学の有名な計量経済学の教授がいるんですけども、LTES の農業を使って、時系列である相関を取ったらパーフェクトになったと、それで喜んでそういう論文を送ってきたけれども、その統計はおれが推計したもので相関があるのは当然だという話を聞いたことがあります（笑）。

統計というのは、実は存在していないものをある仮説のもとで推計した結果である。LTES の場合は、尾高さんにはあまり関係しなくても、いちおう推計の手続きは書いてありますよね。

尾高 そうですね。書いてあるはずです。

原 ところが読まない。だから、長期経済統計を使うときには、推計手続きをきちっと読みなさいと梅村先生からいわれた記憶があります。

靄見 ぼくは外にいましたでしょう。ぼくも農業なんですよ。もともとは農業経済で、マスターまで農業をやっていたんですけども、そのときにぼくは慶應から大阪市大へ。ですから、そういう意味では少し東京の動きと離れているんです。それで卒論を書いて、それから修論を書く段階で、テーマが日本の農業恐慌だから、1920年代の農業のことを勉強していたんですけども、当然梅村さんとか大川さんのものを読んでいたんです。

そのときはじめて、推計で統計値をつくるというのにぶつかって。ぼくはそのときはどちらかというとエコノミストというよりはヒストリアンに近かったから、そんなものを頼りにして議論するなんてできるのかと、そういう反応が第一にありましたね。でも、それからずっと何十年たって見ると、それはそれでそういう限界の上でそういうことをやってみるのも意味があるとは思うようになりましたけれども、そのときは大きなショックを受けましたね。

原 いま靄見さんも言われたように、やはり実証経済学というか、経済学というのは統計も必要条件の一つなんですけれども、同時に先ほどの話ではないですが、マルクスか近経を問わず、どういうプロセスで市場経済の仕組みが変化していった動いているのかということに対するビジョンというか、見方をしっかりとをもってやらないといけないはずですよ。やはりそういう部分がなかなかうまく伝わっていないというか、統計だと統計だけにいっちゃうわけです。

尾高 なぜでしょうね。

原 いや、ぼくもそれはよくわかりませんがね。

尾高 それは、実証研究だけではなくて、理論経済学の研究にもたぶん一般的に言えますね。やさしいところだけつながって次の世代に受け継がれるんだけど、制度とか組織とかということに関することは置いてきぼりですね。

原 置いてきぼりなんです。最近では、情報化革命の時代ですから、パソ

コンを開けば世界中の統計が使えて、あっという間にレグレッションができてしまう。そういう実証研究にどのくらい意味があるのかというのは、ぼくなんかものすごい疑問ですけどもね。

尾高 もともと統計書に載っている数字というのは、政府統計も含めて、推計でないにしても本当の事実であるかどうかは問題ですね。統計書に載せたその時点で、もうすでにある程度つくられた姿ですね。

霧見 そういう意味では、どのようにしてデータを集めて、どのように計算したかというのは、ある程度知っていないといけないですね。その上での利用なんでしょうけれども。

尾高 そうですね。

5. 「長期経済統計」の諸前提

霧見 あと今の原さんの話で、ぼくは遠くからあの長期経済統計(LTES)を見ていて、梅村さんのはぼくはすごくよく読みました。テーマが農業恐慌だから、朝鮮米だとか台湾米の話で、要するに国際貿易みたいな話が出てきますよね。

そのときに大川グループが議論していたなかで交易条件について、ぼくはものすごく違和感を持っていました。交易条件って何だ。あれは要するに物事を決めるファクターではない。ただ、ふわっとした結果だけにすぎないと。

本当はもっとファクターのところまで下がったかたちで交易条件を進化させなければいけないんだけど、それを表だけで議論している感じをものすごく受けて、そういう意味では統計のデータをつくるということもいろいろ問題もありますけれども、こちら側の照らし出すほうのフレームワークのほうの理論というんでしょうか。そういうところも、今から見ると、いろいろ未熟というのかな、未熟とは言わないけれども、やはりまだまだいろいろ問題があるのかなと思います。

尾高 交易条件が結果だというのは、その通りではないですか。交易条件を議論するのは、交易条件の動きを通じて、その背後にあるのがどういう現象なのかということを議論しているのではないのでしょうか。

鶴見 そこはぼくから見ると、非常に不十分だと。交易条件のほうに力が例えば6ぐらい入って、その要因分析のところが4ぐらいしかない。そういう印象を何となく受けましたね。

原 特に小島清先生の交易条件のほうはそうなんです（笑）。ぼくもあれは一生懸命読んだので覚えているんですけども、たしかにそうですね。

尾高 篠原先生は、データを扱っても、すごい直感力で……。

原 ものすごい直感です。

尾高 いいところをスバッとやられる。でも、篠原さんは梅村先生よりもはるかに理論家で、その背後に自分の理論がおりになって、その上でデータに臨んでおられるんだと思います。それだから早いんだろうと思うんですね。

原 でも大川先生に、君は考えていることを3日ぐらいで仮説するけれども、ぼくは3年かかるってしかれたと、篠原先生から聞いたことがあります。篠原先生は、大川先生とはまたちょっとタイプが違いますよね。

尾高 そうですね。

原 いま農業の話になったので、最近の鶴見さんも書いている法政から出た比較経済研究所叢書『近現代アジア数量経済分析』の尾高論文にも関係して少しはなさしてください。尾高論文でも問題となっているように、農業の労働の限界生産力をはかるときの弾性値の推計という大きな問題がありますよね。そして、農業というのはいちばん生産函数がたくさん行われている分野なんですね。

尾高 やさしいから。

原 やさしいからですよ。製造業というのはいろいろな生産物が結合的に生産されているので 産出をはかるためにはどうしても、全てを価額に

換算しないといけなくなります。また生産要素については特に資本ストックをどう価格で評価するかという大変な問題がありますよね。

ところが、農業の場合には、米何トンといった生産量の統計があります。また投入の方も、耕作面積何ヘクタールであるとか、労働に関しても、梅村先生の推計された何人とか新谷正彦さんの推計した労働何日という数字があるわけです。また資本ストックでも、例えば牛馬何頭といったデータがあるわけです。つまり、経済学で定義されている生産函数を推計できる物流データがあるから、やりやすい。それから、農家の個票データもありますから、サンプルの数がやや多い。そうすると、いろいろなかたちで計算ができるということになって、たぶん一つはデータの上で多いのではないかという気がするんです。農業はもともとのデータがこうですから、多くの生産函数の推定がなされたのだと思います。

ところで、尾高さんが最近書かれている「全部雇用」についての論文ですが、大川先生が提唱された偽装均衡があてはまるのか、それとも賃金と限界生産力の均等という市場原理があてはまるのかの検定においては、労働の生産弾力性を推計することが不可欠になりますよね。問題は日本農業のこの生産弾力性 (elasticity) の推計値には、大層大ききのちがうものがあるということです。そして、この推計値にいろいろな異なった数値があるということの背景には、農業の生産函数をどういう理論的仮説の下で推計しているのかという計量経済学の基本問題があるようにおもっているのです。TEA (Theoretical Economics and Agriculture の略、1952年6月に結成された研究会) では、一時期この辺の問題が盛んに議論されていました。ぼく自身も随分前にタイで農村調査をやり、稲作の生産函数を推計したことがあります。その結果は英語で *The Developing Economies* に発表しているんですけどもね。

中部タイの一つの稲作農村で、調査した農家の戸数はほぼ100件でしたが、面積あたり肥料の投入量にはほとんど分散がないんですよ。よく考えてみると、これは合理的に説明がつくことでして、つまり、農家全部が肥

料の同じ市場価格に直面しているからです。ところが、面積あたり労働投入量、これはマン・デイ（人・日）単位で調査したのですが、これにはおおきな分散があるんです。ぼくは大川先生にもこのこと報告したことを覚えているんですけども、やはり大きな農家と小さい農家では労働投入が変わるんです。小さいほど多いんです。それは結局レイバーマーケットがパーフェクトではないですから、自己労働評価みたいになっているからだと考えたわけです。生産函数を推計しようとしたら 分散がない肥料を説明変数にもってくることはできなくなり、結局のところ労働投入だけで単収を説明するという結果になりました。

何を言おうとしているかという、手許にあるデータがどのような理由でみられるようになったのかという、「データを発生させたメカニズム」を意識する「識別問題」をきちっと踏まえないと、意味のある生産函数の推計もできないのではないのかということです。

尾高 統計を使って研究する人と理論をやっている方と、それからデータをよく知っている方との間で、もっと対話が必要ですね。

原 そうなんです。

尾高 それだけではなくて、理論そのものにも問題があるかもしれない。大川先生の長期経済統計モデルの研究会に上野裕也さん（後に成蹊大学の学長になられた）がおられて、「生産函数は近代経済学のアキレス腱です」とおっしゃった。その通りだと思いますね。

貿易論でも、中心にあるのは生産函数ですよね、理論的には。そういうわけで、生産函数はないわけにはいかないんだけど、あっても問題がある。

原 いまデータをよく知っていてつくる方と理論家との間の対話というのが少ないのではないですかね。

尾高 その片方が専門なんだけれども、ある程度両方を知っている人が両側にいて、その上でやりとりすると、もう少しよくなるかもしれない。

6. 経済史における理論の役割

霧見 今の理論とデータですが、尾高さんをそばで見ていると、ぼくの印象はエコノミスト尾高というのがわりと強くあって。でも意外とエコノミスト誰々と考えて探してみると、そんなに多くはない。

尾高 えっ、そうですか（笑）。

霧見 そのように称している人で、らしい人はいっぱいいるけれども、必ずしもぼくの基準からいうと、そう多くはない。

尾高 エコノミストの資格はあまりないのではないかな。

霧見 尾高さんは、それと歴史がありますでしょう。歴史に対する関心があって、それが交差している。労働市場分析だって、理論的な二重構造分析なんだけれども、明治からたどりますよね。ああいう仕事と、それからそのあとのリプロから出た本があるでしょう。

原 例の職人の世界？

霧見 『職人の世界・工場の世界』。あれはたぶん最初の本の分身か落ち穂なのかもしれませんが、ただ何となく外から見ていると、必ずしもそういうふうには見えなくて、もう少し歴史のなかに食い込んでいて、尾高さんの中に歴史に対する興味みたいなものがあるのかなと思うんですね。

それが経済史、あるいは「解析的経済史」というのがありましたでしょう。あれが目指しているものは何かということをお伺いしたいんですが、理論とデータ、理論と歴史でもいいんですが、それをブリッジしたときに尾高さんは何を狙っているのかということ。

尾高 難しい質問ですね。

霧見 何となく尾高さんのあの文章を読んでいると、すごく控えめなんです。控えめというのは、どういうのかな。データがあって、歴史があったときに、そこへ理論仮説を持って行って、それが実証されるか実証されないかというような感じが強い。すごく理論のほうが大きくて、理論のた

めに現実があるような、そのように感じて。むしろそこを踏みこえて、データだとか現実から理論を引き出してくるアイデアみたいなものを取り出すというのに、解析的経済史というのがあっていいんじゃないかと思ったんです。

とりあえずは尾高さんのなかにある歴史というものは、エコノミスト尾高のなかでどういう位置付けられるのか。

尾高 難しい質問ですね。

雑誌『社会経済史学』の最近の動向を見ていると、ぼくの勝手な感想だけれど、あまり面白くない。非常に細かい精緻な研究だけれど面白くないものが多い、と勝手に思っているんですね。その理由は何かかというと、今のご質問にたぶん関係しているんだろうと思うんですけれども、ストーリー性がない。

「解析的経済史」の「解析」というのは、ストーリーの部分に該当すると思うんですが、どうでしょうか。要するに、社会科学でも観察が大事ですが、観察と何らかのかたちで関係したものとしての理論、あるいは解釈があると思うんです。

観察の結果として理論が構築されるという面があるんだけど、逆に、たんなる観察というものはなくて、理論的な仮説なり解釈が基礎にあって観察して、その結果を記述するんだと思うんです。つまり、歴史を見るとときに、ただの白紙の（ニュートラルな）観察ではなくて、何らかの理論なり認識が基礎にあって観察しているんだと思うんです。

そういう意味で理論は大事で、実際のデータを切る包丁みたいなものです。経済史を書くんだったら、現代の経済学が（いろいろな問題や限界はあるんだけど）どういうことをどういう理由で考えているかを一応は知っておく必要がある。それを知った上で観察して、その観察の結果を解釈するのが経済史ではないか。日本で経済史の訓練を受けた人は、そのところ、つまり包丁の部分が少し弱いのではないかと言いたいです。

アメリカの経済史やヨーロッパの経済史がいいかどうかかわからないけれ

ども、現在の主流の包丁は新古典派経済学でしょう。新古典派経済学にもいろいろ問題があるけれども、でも何もないただのデータということはあり得ない。ただのデータのように扱って書いた論文は、ぼくには面白くないのです。

嶋田君はどう見えていますか。

嶋田 難しいです。私はそういう論文とかは見ないんですが、本当に数式ばかりでわからないというか。

尾高 数式ばかりになった論文も面白くない。

嶋田 よく(神戸大学の)三重野と話すんですけども、原先生とか石川先生と我々は接してきて、たぶん何でもガーッと包み込んでしまうような先生というのは、もうたぶん出てこないという話をよくしていて、三重野も昔のぼくと同じような社会学部にいたのでゴジャゴジャとしたのが好きで、彼も経済に行っちゃったので極めて狭いところをグーッとやっていて、でもこれは一体何の役に立つんだろうなということを常に自分で思っているらしくて、そういう話はよくします。

ですから、外にいる私もたまにそういう経済学会とかに入っていて見るんですけども、よくわからないというのがたしかにありますね。

原 ぼくも同じ意味かどうかわかりませんが、何度も口にしますが、大川先生がデータから何かをいうときには conceptual framework をはっきりとさせることが必要だと何度も教わりました。データではなくそれから君は何を語りたいのかと、よく言われたんですね。

データとか事実というのは、乱暴にいうとなんぼでもあるわけです。どうしても取捨選択しないといけない。取捨選択の仕方というか、そこにある種のストーリー性みたいなものが必ず必要になります。新古典派かどうかは別にして、ある枠組み、抽象的、理論的枠組みというべきものがないとできないです。

尾高 それはたぶんマルクス経済学でも同じだと思います。

原 そうなんです。

尾高 ただ、理論から出てきたさしあたりの結論が、最初から実証分析の結論になっているようでは困る。

原 それは困るんです。

尾高 それは、理論が新古典派であってもなくても同じ。

7. 「役に立つ」経済学とは？

原 今の話は、ぼくも尾高さんに聞いたかったことがあるのは、先ほどもちらっと言われましたけれども、石川先生から言われてミャンマーをやられましたよね。尾高さんのメモにも、ちょっと「政策構想フォーラム」のことが出てくるのですが、純粹に「研究」をやることと、現実にある種の具体的な政策を公表すること、このふたつのギャップをどう考えるべきなのでしょう。

ギャップというのはへんな言い方ですが、そのへんの問題というのは、いま例えばやや乱暴に言うと、今の若いエコノミストというか、大臣になりたがるやつがいっぱいいるじゃないですか。そういう雰囲気がちょっとあるじゃないですか。いや、まあ、知りませんが。

尾高 それは竹中さん？（笑）

原 いやいや。

薮見 でも、ありますでしょう。

原 そういう意味ではあるんですよ。

薮見 しかし、大臣というのは……。

原 大臣になりたいひとは大きな自信家ではないでしょうか。つまり、自分は正しい研究をしている。よって、政策にそれを実現させたんだというようなことを言う人がいるんですよ。ぼくは、まあ、それはしょうがないなと思ってからかっているだけなんです。

このような時代の雰囲気が強い状況のなかで研究というものの政策へのかかわり方みたいなものは、どのように考えたらいいのか。ぼく自体、実

はよくわかっていないんですけれどもね。石川先生も、ぼくはベトナムと一緒にずっとやっていたから、そのへんはいろいろ考えられていたように思いますが、先生ご自身は体験からどうですか。ミャンマーの政治がへんで、何も役に立たなかった、それはちょっと別問題にして（笑）。

尾高 ミャンマーの経済構造調整ですか。ぼくは石川先生のご推挙があったためだと思うのですが、日本側の総括（旗振り）になったんですね。でも正直なところ、ぼくにはあまり「総括」をする資格はないと思った。その一つの大きな理由は、政策提言をやるほど自分がマクロ経済学に通じてはいないので、例えば伊藤隆敏君みたいにすごく有能な学者でありエコノミストであり政策提言もできるような、ああいう人のほうが総括にふさわしいと思いましたね。

原さん、でも、それは人それぞれではないですか。人によっては経済学者であって、大臣になっても……。

原 もちろん、構わないんですけれどもね。

尾高 構わないし、政策の提言や運用に向いている人がいると思うんです。経済学の立場からしても、経済学の分析の結果出てきた結論が政策に反映されるのは好ましいと考えるのが自然ではないですか。

原 自然なんでしょうね。ぼくは、寺西さんが一橋の経済研究所長をされていたとき一緒に東洋文化の所長をやっており、たまたま偶然に順番がまわってきて全国附置研所長会議の会長にさせられたんです。そのときにちょうど法人化問題が絡んでいて、附置研を切り離すといろいろなことをやっていたときがあるんですが、そのときにぼくは文部省の局長と何度も接触しているんです。

そのときにいろいろな話をされていて、非常に面白いことを言われましてね。附置研は世の中に本当に役に立つか。これは、例えば東大で医科研でがんの研究をしている。こういうグループと、もう1個は徹底的に世の中に役に立たなくても、若い人に夢の売れる研究はいい。具体的に言うと、天文台なんですよ。あれは15光年の星がどうなったかって役に立たない。

文部省の局長の言う話なんですが、例えばああいうのをテレビなんかで流しますでしょう。そうしたら宇宙のなぞがこうだとか、そうすると若い人が興味をもつ。世の中に役に立つのと、片方は若者に夢を売る、この二つはいいんだ。真ん中の役に立つ立つと言いながら、役に立たないのがいちばん問題で、これは実は経済研究なんですよと言いついたんですよ、その局長が（笑）。

そういう感覚で役人が見ているなという印象がありまして。

尾高 原さんは、どのように答えたんですか。

原 ぼくは、いや、ぼくは東洋文化ですからって逃げました（笑）。つまり、ある意味で日本の、これは官僚の発言ですが、研究の社会的意味ということが特に今はうるさいんですよね。そういうときに、特に経済の研究というのはある意味で、どうも世の中の人はずいぶんそういう目でみているんですよね。

尾高 なるほど。それはまたもう一つの難しい問題ですね。（法政大学）比較経済研究所も、一体どれほど世の中のための研究をしているか（笑）。それは、嶋田君にもあとで聞きたい、難しい問題ですけどもね。

原 難しいですよ。ただ、ぼくが先ほど大臣になりたがる人がいるというのは、単に個人の個性もあるんですが、何となくそういうプレッシャーみたいなものが時の雰囲気としてあるんだと思うんです。だから、そういう感覚がどこかで出てくるようになっているのではないかというのが私の印象なんですけれどもね。

尾高 社会科学も役に立つんじゃないですか。ただ、何をもって「役に立つ」とするか。

原 そうなんです。夢を売るか、がんが治るかなんて言われたら（笑）。

尾高 夢を売るのも、もちろんいいでしょう。でも、例えば年金をいくらにすれば適当かとか、そういう計算をするときに、経済学とか社会学の知識がないとできないでしょう。だから、役に立っているはずだと思います。

す。

そういう、「役に立つ」部分が仮にあるとして、その議論の根底に純粹経済学の理論もつながつているはずだと思います。仮にすぐには役に立たなくても、長期的に役に立つものになるかもしれない。ただ学問というのは、何の学問でも、遊びの部分が……。

原 ないといけないですよ。

尾高 ええ、必ずあって、それがないとその知識の回転の自由度が失われる。文部科学省の官僚が本当によくわかっている人ならば、その遊びの部分をうまく回転するように政策をつくるはずだと思うんですね。そこが難しいところですね。

原 だから、やはりそれは人文系の学問、人文社会系の学問が自然科学に……。同じ自然科学のなかでも、東大の場合でいうと理学部の天文とかの連中は、やはり。

尾高 数学とか。

原 夢を売するという感じですね。だから、単に社会科学だけではないんですけれどもね。ただ、経済学は、他の社会科学の領域に比べると、政策提案をしやすいというようになりますから、そういう部分はある。

尾高 サンスクリットとかは？

原 多分政策提案なんてできない。だが夢を売ればいい。ところが、文科省の局長が言ったのは、では原先生、東文研にいるサンスクリットの専門家とか漢字ができるまでの亀の甲羅にかかれた文字を研究している人に、小学生にわかる教科書を書かせたらどうですかと言われたんです。それで、帰ってそのこと教授会で言ったわけ。ところが、よく考えてみたら、そんなことを小学生にわかるような文章で書けるやつは誰もいなかった（笑）。

尾高 ただ、もう一つ別の問題がある。すべてをユーティリティ（効用）に還元して考える思想そのものが問題かもしれません。「役に立つ」ということがすべての尺度になるのは問題ではないかな。ではどうすれば

いいかといわれると困りますけれどもね。

原 だから、これも難しいですね。というのは、これも東亜経済研究所の場合はぼくはあまりよく知りませんが、東洋文化というのは昭和16年の11月26日にできているんですよ。真珠湾攻撃の2週間前。

尾高 へえー。

原 旧評議会の記録に、大東亜共栄圏建設のための文化的基礎調査をやるのが東洋文化の設置目的であると書いてあるのです。

戦後 GHQ が入ってきました、東大でもかなり先生方が公職追放パージされましたよね。だけど、東文研は誰も出なかったんですよ。なぜかという、ジンギスカンの墓がどこにあるなって研究だったわけで、どうも当時の「御用」には役だってなかったからです（笑）。

だから、その学問というのは、何の役に立ったか、当面の御用には役に立たなかったわけですが、その研究でジンギスカンの墓がどうなるとか、日本騎馬民族はないとか、それから中国のギルドの資料蓄積といったことが研究の中心でした。

ぼくなんかはそういうのが重要な学問だと思っていますけれども、そういうのがなかなか許されない雰囲気、特に東大の場合は法人化したあと、やはり「そういうのは……」というような雰囲気がどこかにあるんですよ。

尾高 ユーティリティがすべてだという風潮があるとして、それは日本だけではないかもしれませんが、それに対する反論——とまではいなくても、問題提起を知識人側でする必要がある……。

原 あるんだと思う。

尾高 ありますね。

社会科学と政策との関係については嶋田君の意見もあとで聞きたいのですが、実はぼくは、これから何をするかを考えています（笑）。ぼく自身は今の、社会哲学とか文化哲学、社会経済思想などにつながる問題を考えるのに、今までやってきたことを——たいした蓄積でもないけれども——

役に立てたいと思っています。

社会哲学とか社会経済思想とかが、限られた人の間であっても共有財産になって、ものの考え方や世界観の形成に役立つ、そのような試みがもっとあってもいいのではないか。少なくとも最近の日本では、経済哲学とか社会哲学とか社会思想とか宗教思想とか、そういうことにかかわっている人は少ないですね。でもそういう文化科学の営みは、先ほどの文部省の人が言ったのと違う意味で、役に立つと思うんですね。大事だと思うんです。

例えば、アメリカのブッシュさんの政策に対する反感は世界中にありますね。ではなぜブッシュ政策が問題かということは、もっとはっきり自分自身で認識して発言する必要がある。それができるためには哲学的な（哲学的と呼ぶなくてもいいんだけど）、根源的な問いかけが必要ではないか。そういうことをやってみたいなど、ちょっとと思っています。

霧見 経済学がサイエンスとしてあるのだけれども、そのサイエンスの下にある部分として、要するにフィロソフィみたいなものがあるはずだと。

尾高 そうですね。今の経済学はその認識が足りないか、もしかすると何もないのかもしれない。計算だけやっているのかもしれない。そして、計算だけやっているのでは社会科学とは言えない。

8. 社会科学の方法と業績評価

霧見 翻ってみて、いろいろな仕事をなさっていますが、そのときに尾高さんのそういう哲学だとか宗教だとか、そういうものというのは今まで意識されていなかったんですね。

尾高 それも難しい質問だな。

霧見 いつも難しい問題でごめんなさい。

尾高 自分でそういうものを認識するというか、積極的に意味付けて考

えたりはしていません。でも、いつも問題意識が大事だと思っています。問題意識の形成のところで、なぜそれが大事だと思うかというところに関係しているかもしれません。

学生に、社会科学の卒論を書くのは料理を作るのと同じだと繰り返し言ってます。あまり通じていると思わないんですけれども。今の学生はあまり料理をしないのかな。

卒論にもいくつかの種類があって、料理の材料のことを書いてもいい。料理のやり方について、料理法についてまとめてもいい。だけど、多くの場合は実証的研究で、データと理論とを両方くっつけてやる。つまり、いかにしてうまい料理をつくるかが勝負だと思うんですね。

ぼくがやろうとしてきたことも同じです。先ほどの経済学と政策との関係とも関係しますが、要するに材料を集めてきて、それからクックブックを持ってきて、その材料を料理して、できるだけうまい料理を作る。うまい料理ができたときは、実証研究として満足なわけですね。

データによって、つまりどういう食材かによって結果も決まるし、どういう料理法を使うかによって結果も決まるわけだから、両方大事で、その間を行ったり来たりしないといけない。それが実証研究なので、そういう研究を書けばいい卒論ができると学生にしょっちゅう言っているんですが、どうもあまり通じていないですね（笑）。

覇見 いいたとえですけれどもね。

尾高 政策も、料理の一つかもしれません。

原 だから、政策というのはどれぐらいのタイムホライズンで考えるかということにまた影響してきますよね。経済政策なんかの場合でも、30年先のことを見越して、今やることを言うのか、当面やることかということで、また矛盾したりしますけれどもね。

尾高 でも、ぼくが文部官僚だったら、先生方一人ひとりが何をやっているかを見れば、「役に立つかどうか」——どういう意味でかは別として、ちゃんと意味のある研究をやっているかどうかはすぐわかると思います。

わからないようではダメですね。

霧見 それはということですか。

尾高 ちゃんと仕事をしているかどうかということ。

霧見 仕事をしているかどうかという意味？

尾高 すぐわかるじゃないですか。もちろん、仕事が充実しているかどうかというのは非常に主観的な判断だけれども、できますよ。そう思うんですけれどもね。

アメリカでも同じような問題がありますね。すごくよくできる人だと思うのに、定職に就けないで、はねられる人がありますね。

アメリカの経済学で最近の一つの問題だと思うのは、(前からそうかもしれないけれども) 研究テーマにファッション(流行)があって、ファッションに合わない人はなかなか職に就けない。でも、ファッションですべてが決まるのは問題だと思うんですね。ファッションは変わるから。

9. 評価主義の問題点

嶋田君、政策と理論とのかかわりは JICA ではどうですか？

原 JICA なんか、本当にそうなんだよな。

嶋田 JICA は海外を相手にしているようだけれども、国内の省庁とか関係者とのやりとりが重要なことも事実で、二つの顔を持っているところがあります。これまで JICA にかかわった方は、皆さんお感じになっているかもしれませんが。

そのような中で、「自分の存在は何なんだ？」というところがあって、JICA は海外援助をやっていると言うのですが、たしかに援助はやっているんですけれども、ではどういうのが援助なのかなと？

私は常にわからなくなっちゃって、どんなつまらないことでも援助でくれるようなところがあって、全然関係ない分野、まさに遊びと言われるような部分も非常に大切に、そういうものも大切にしようと前はしていた

と思うんです。

ただ、先ほどの話の続きですけれども、今のお役所とか、国立大学もそうでしょうが、業績はすべて評価される。JICAでも、私個人もされるし、組織もされるし、プロジェクトもされる。そういう中で、いろいろな遊びの部分がまったくとは言いませんけれども、なくなってしまっています。

それでやられてしまうと、たしかに外に対してアカウンタビリティは保っているような気がするんですけども、実は内容のところが全部吹き飛んじゃっているようなところがあり、形式のなかでやってしまっているところがある。たぶんそれは大学も同じなのかなと思うことがあります。

失礼な話なのですけれども、実際に大学は大学で何をやらなければいけないか、お金を持ってこなければいけないし、何か、「つて」を探さなければいけない。一方、JICAはJICAで、やはり大学とも何かやらなければいけないというところがある。でも結果的には、形式的なやりとりで終わってしまうところがあるような気がします。

昔のように、何かだかわからない中でも、先生たちや民間の方と一緒に仕事をしていくとう感じが何かなくなってきた、やりにくくなってきた、というところがあります。すみません。先生の言われたところと外れちゃったんですけども。

尾高 組織がでかくなったから、評価によってアカウンタビリティをはからざるを得ない。

最近の評価がはやりだけれども、評価をするためには、物差しが一つにならないといけない。でも、先ほどの料理の話でも、うまいかどうかという尺度は一つではないですね。ところが、一次元で測らないと評価できないから、本当はいろいろなベクトルがあるのに、全部一次元のスカラーにしてしまう。そこが一つ問題ですね。

もう一つ、毎年評価するというのも問題ですよ。ものによってはそれでもいいんですけども、1年ごとに評価できないものもありますものね。

原 東大の場合ですけれども、今は法人になって、今年度の業績を必ず報告しろと来るわけです。昔は、「なし」とかそういう先生がいっぱい平気でいたわけです。今は「なし」と書いたら、ばかと言われてしまう(笑)。これは、妙なことになっているんですよ。

尾高 業績をどの時点ではかるかにもよりますね。進行中のこともあるし。

原 それが結局、どうもよくわからないけれども、JICA なんかは絶対にそうだと思うんですけれども、大学にもやや乱暴に、これだけの研究費と人件費が入っているんだから、アウトプットはこんなものだろうと、数値を出せと言うんですよ。

だから、極端によく言うんですけれども、最初にそれを考えたのは民博の梅棹忠夫さんですよ。あの人が有名な論文を書いているんですけれども、固有名詞は出てきませんよ。民博の職員一人当たり給料をいくら渡して、何ページ書いた。1万当たり何本と、論文のグラフをこんなに出したことがあるんです。梅棹さん、そういうことをやったことがあるんです。

尾高 その論法でいくと、予算が増えれば、そのカーブも上にシフトする。

原 いや、そのあたりはわかりません。だから、結局何となくそういう方向にいきますので、非常にクイックなエフェクトを求める。それが、とにかく単年度ですからね。組織としては、独立行政法人も5年とか6年ですけれども。だから、5年とか6年だけでも、個人個人は単年度で入ってきますから。

だから、これは研究組織のあり方だと思いますが、やや乱暴に言えば、東大とか一橋の旧国立大学、それか JICA といった特殊法人、こういうのがいま全部独立行政法人でしょう。まあ、過渡期なのかもわかりませんが、独立行政法人というのは法律上5年とか6年に見直すと書いてありますから。そうすると、中間報告を3年目。中間報告3年目っていったら、毎年やらないといけない。

結局、何のことはない。評価とか、そのためにだけ膨大な時間が使われることになってしまう。

尾高 そうですね。それにとられる時間だけでも大変。

原 時間だけで大変ですよ。だから、そういう方向に経済学というか、研究の方向は行きかけていますからね。

尾高 これは一種の大量生産の思想だと思うんですね。

大量生産にももちろんいいところもあるし、現代の社会は大量生産でつくられたものが基本になっていて、個性のある商品も大量生産で作られた部品を組み合わせてつくられている。

大量生産は大事なんだけれども、でもすべてを大量生産の思想でくるわけにはいかない。とりわけ人文・社会系の研究の場合は、一人ひとりかなり違うことをやっていることが多いですからね。一つの物差しでははかれないということを認識して、ではどうすればいいかを考えないといけない。

お医者様の診断もそうですよ。いまは全部コンピュータでやるでしょう。コンピュータでやるのはもちろんいいんだけど、そうすると一人ひとりの個性が見えない。そこが問題。

原 そのへんがこれからの研究というか、特に比較経済とか経済史とか広い意味で歴史とかって、まず研究成果を出した場合も、非常に長いタイムスパンで考えるようなアウトプットが出てきますよね。そういうものが当面の妙な雰囲気の中なかでは研究者自身のインナーサークルの中なかで、そういうものを……。

尾高 自分で……。

原 自分で評価をしなくなっていくというような方向が出始めるのではないかという気がちょっとしてしまってますね。

尾高 それはどういうことですか。

原 つまり、若い連中がゆっくりそういう研究に本当のところ就けるような仕組みができるかどうか。というのは、ポストの数がある。それから

任期制になるだろうし、ということになってくると、当然ファッションというか、評価されるもののほうに自分の研究を持っていこうとしますよね。

尾高 それはそうです。もうすでにそうなっています。

原 だから、もっと加速するのではないか。

尾高 アメリカはそうですね。だから、テニユアが付くまでは、本当に自分のやりたいことをやっていないかもしれない。ヨーロッパは、もうちょっとスパンが長い。特に大陸では。

原 大陸は長いんです。

尾高 ドイツでは研究者になる人が比較的少ないから、それだけに自由があるかもしれません。その代わり、研究職に就くのは非常に大変かもしれない。でも、問題がみんなに認識されれば、改善の工夫も出てくるんじゃないですか。

原 もちろんそうなんです。

尾高 研究評価も、どういう成果を挙げたということじゃなくて、むしろ……。

原 プロセス。

尾高 それもそうだし、むしろ成果を挙げていない人をどうするか(笑)、そっちのほうの問題だと思います。

絵所さん、いま研究評価の話をしています。

絵所 尾高先生の？

覇見 違う違う(笑)。

原 つまり、別の言い方をすると、絵所さんのインド研究は何の役に立っているんだという話をしているわけですよ(笑)。

絵所 何の役にも立っていない(笑)。

原 そういう話をしていたの。

絵所 この前、某国立大学大学院の評価委員会に行ってきました。評価しろって、一人ひとり業績を入れてね。難しいです。

原 難しいよ。だから、そういう話をしていたの。いま一般的に。

絵所 業績表をパッと見て、正直言って、将来に残るような仕事はゼロだと思いました。

靄見 ゼロって、どういう意味？

絵所 業績らしいものは何かあっても、ないに等しいな、あんなものでは（笑）。自分のこと、棚に上げて言っているんですが。

靄見 成果として評価できないという意味ね。

絵所 たしかに経済学者の場合レフリー付きのジャーナルにいくつか論文が掲載されている人がいます。しかしどうってということないよね、

法学や政治学の場合はそういう評価システムが確立しているようには見えない。それで考えちゃって、何なんでしょうね。いや、自分のこと、棚に上げて言っているんですが。

原 大体、棚に上げて言ったほうがいい。

尾高 文科省の担当官が、研究所、特に国立の附置研を見て、三つ種類がある、がんの研究みたいにすぐに役立つ研究、それはいい。天文台みたいに、夢を売る研究、それもいい。でも中間はだめ。

原 特に経済研究は（笑）。

尾高 そう言ったんだそうです。

絵所 しょうがないじゃない。ぶつぶつ文句を言うのが経済学でしょう。役に立つわけではない。

尾高 でも、経済学もある意味では役に立つのではないか。立っているのではないか。

絵所 そうですね。でも、国家政策学としてですよ、役に立つとしたら。昔からそう。

尾高 そう、昔からそうだね。別に最近だけではない。

絵所 どうやって国家をマネージするかという学の一部ですよ。

尾高 ぼくは、それは料理と同じだと言うんですよ。うまい料理を食わせるのと似ている。材料学をやってもいい。それからクックブックを作る

のでもいい。だけどぼくは、両方を合わせて料理したい。そして、料理がうまいかどうかで評価することはできるはずだ。ただ、「うまい」にもいろいろな意味があるから、一つの物差しで評価するのは難しいし、たぶん危険でもある。だから評価をしたいのなら、評価の方法を工夫する必要がある。

原 ただ、そのへんが現代の日本で、文科省の局長がそんなことを言うように、やはり社会科学とか人文科学のほうからそういう議論があまり出てこないというんですね。

尾高 そういう議論って？

原 自然科学とか何とかならに対抗するこういうのを出してくれと、それが何か非常に出にくい。3年ぐらい前の話ですが、そう言っていましたね。

絵所 ひとたび評価の尺度が決まれば、順番がつきますね。0点か100点はつくと思う。ただしその尺度に合意があればの話ですが。

今やっているのは、単にレフリー付きのジャーナルに論文が何本載ったら何点とか、このジャーナルだったら10点、このジャーナルはレフリー付きでも8点とか、このジャーナルは2点とか、そういうものでしかないですよ。

原 いわゆる数値化なんですよ。

絵所 内容まで検討しているかという、ちょっと考えますね。

尾高 すべて数値化すればいいというのは、非常に貧しい発想だ。

絵所 しかし、議論のレベルがそこまでいくと、経済学者はお手上げになってしまう。何らかのかたちで数値化はできるでしょう。ただ、その尺度に関して、何の尺度かという点を明確にしない限り、みんなの合意は得られない。

原 だから、そういう話になるとケネス・アローが言ったように、民主主義で全部で議論したら、絶対に共有できる評価函数はできないよということになってしまう（笑）。

絵所 何かアブソリュートなミニマム基準が必要となる。

原 だから、そこは哲学というか、何か必要なんですよね。功利主義ではない、単なる単純なユーティリティだけではない。

絵所 問題はアメリカの経済学界でできあがった尺度のあり方でしょう。何回論文が引用されたかとか、どのジャーナルに載せたかという基準それ自身の寿命というのはそんなに長くないと思います。長い歴史のなかで見て、こういった評価基準の意味も考えることが社会科学の対象になります。

尾高 そういう意味での「アメリカ主義」が現代の一つの問題ですね。

絵所 プラスもあると思うけれども。

原 もちろんプラスもあるんですよ。

絵所 マイナスもとともある。

尾高 問題があるということをみんなが認識するだけでも改善すると思います。

絵所 たしかに、これでは多様な価値観がなくなっていってしまいます。

原 なくなるよ。

絵所 あまりそういうのをやっちゃうと、ラディカリストが出てきますよね。結局、少数派は反乱するでしょう。テロリズムの世界になってしまう。

尾高 意識して多様性を存続させないといけないと思うな。

京大の人文科学研究所（人文研）は、昔から多様性を重んずる人事を考えてきた研究所ですね。最近はどうですか。

原 最近はあまりよく知りませんが。

尾高 研究所だけでなく、大学のスタッフも、一つのことだけに特化してしまうのではなくて、多様性を大切にする努力が大事だと思います。

絵所 経済学がいちばん異常なんじゃないですか。異常というか、極端にまでいっているんじゃない？ほかの社会科学、人類学、政治学、国際関係、法律学とか、経済学みたいにはなっていないんじゃないでしょうか。

経済学は社会科学のなかでも特殊な分野ではないかという気はします。

原 先ほどの話ではないけれども、日本だって、もし東大の経済学部だけを例にあげるとよくわかりますように、「近経」では、ある人が死んでしまったから、結局ひとりしかなかった……。

尾高 古谷 弘さん。

原 そう、古谷さんです。結局、小宮隆太郎先生の世代が登場するまで、労農派か講座派しかなかったわけでしょう。

尾高 木村健康先生は？

原 木村健康先生は駒場なんです。それが今では、マル経はずっと減っちゃって、みんなアメリカの Ph.D. になっちゃったわけです。だから、ある意味では同じことなんですよ。研究者の多様性を、どうもやや排除していく傾向があったのではないのでしょうか。

尾高 ぼくは小宮先生が好きなんですけれども、小宮さんと話していたら、大石泰彦先生のことで面白いことをおっしゃった。大石さんは、学者としてはあまり業績がなかった。だけど、ああいう人がいると学生は自由に発言しやすい。逆に先生ができすぎると、学生は萎縮していろいろなことを言わなくなる。勝手にやらなくなる。しかし、大石先生はそうでなかったから、あれは非常にいい先生だ。

原 だから、私の友達は、小宮さんは誰も質問できなかったって（笑）。

尾高 小宮さんがどうかは（笑）、また別です。

原 小宮ゼミの出身者が、小宮さんは怖かったていってました（笑）。

絵所 誰でも教員になれるということでしょう、反面教師もあるわけだから、誰でもなれるんです。

尾高 だからできる人のほうがいいとも言えないし……。

絵所 相性もあります。先生ができすぎると、学生はやられちゃうものね。

原 ただ、絵所さんが言ったみたいに、大学によっては経済学部、ちょっと今は変わり始めましたけれども、東文研は、もうできたときから絶対

に同じ人は採らないということになっているんです。必ず多様性があるって。だから、地域とあれて、必ず違うのを採るということで、これはオフレコですが、自分の学生は絶対に採れない仕組みになっているんです。絶対に後釜にできない。

尾高 それはなぜオフレコなんですか（笑）。

原 オフレコというか、今の若い人はあまり知らないんです。要するに、人事を見ればわかるんです。もう必ずそうになっているんです。

尾高 それは、京都の人文研と同じですね。

原 よく似ているんです。もともと同じですからね。

絵所 健全なんじゃないですか。

原 そうなんです。ある意味ではそういうほうが本当はいいはずなんです。ところが、なかなか今のロジックからいくとね。でも、これは逆に言うと、共同研究ができないんですよね。

尾高 ああ、それはそうだ。

原 まあ、似たような者がいますから、クラスターはできるんですけども。ただ、みんなバラバラですから。だから、マトリックスで全部穴が開いているというので、領域が西アジアまで、イスラム圏までカバーしていますし、ディシプリンが一応並んでいますから、そうすると穴だらけのマトリックスなんです。

尾高 経済研究所だったら、共同研究はできますよ。

原 ぼくは経済研究はできると思います。

尾高 それは、くくり方の問題ですね。どちらがいいかどうかは、ちょっとわからない。

絵所 まあ、やり方次第でしょう。実際には、そこに対話があれば面白いけれども、お互いに全然知らなかったらまったくすれ違うだけで、お互いさまの教養の問題ですよ。

原 あるいは、そういうことが好きかどうかということもある。

絵所 興味があるか。

原 やはり自分の「専門以外」のものにどれぐらい興味を持つか、そのへんもあるんですよ。

尾高 でもそのへんも、今後は大事ですね。

絵所 ぼくが最初に LSE (London School of Economics and Political Science) に留学したとき、アマルティア・センがいて森嶋通夫先生がいて、ピーター・ワイルズがいて、P.T. バウアーもいたり、そうそうたるメンバーがいて、よく一緒に研究会をやっていました。

日本のこととか、センは森嶋先生に聞いて結構勉強していました。ああいうのは素晴らしいなと思いました。分野は違うけれども、お互いに勉強する、ああいうことがあるということが学問の黄金時代ですよ。

尾高 それも、最近足りませんね。外部評価を忙しくやるよりは、もうちょっと先生方の、研究者一人ひとりの時間を自由にして、もっと研究会をやるほうがいい。

原 だから、今やや乱暴に言うと、同僚と会うのは教授会だけ。それで、みんな別々の学会に所属していて勝手なことをやっているから、外で研究会をやっている。結局、東文研はなるべく今そうしないようにしているんですけれども、どうも何となくね。

尾高 それでは、研究所である意味がありませんね。

原 意味がない。そういうことです。昔、そんなことはなかったんですけれどもね。

尾高 何で東京はこんなに忙しいんでしょう。

原 うん、それもあるんでしょうね。

尾高 以前から、それを労働経済学の研究トピックとして研究するといっているんだ。

絵所 何でこんなに忙しいか。変わったんじゃないでしょうか。学者も変わったし、学者の使われ方も変わったんじゃないですかね。

尾高 前、ハーヴァードにいたときもやはりそうでしたね。仲間と会話する時間はあまりなかったですよ。いい大学はみんな忙しくて、互いに交

流しないのかもしれない。

絵所 昔のLSEはそんなことなかったですね。あれは79年、80年ぐらい。コモンルームによくみんな集まって、ゼミも一緒にやるし、本当に面白いことをした。

原 ぼくはいろいろなことはわかりませんが、官僚の方からいえば、東京は楽なんですよ。だって、呼びつければいいから。ただし、本当に偉い先生は官僚の方から来ますよ。だから、時間、このときに来いて。ところが、今は官僚のほうが偉いですから（笑）。

結局、向こうも、官僚も何となく使いやすい人とやりますから。ただ、今は必ずしも東京だけではないですよ。もうちょっと地方でも、しょっちゅう出てくる人はいますよ。

絵所 いや、地方のほうがひどいです。もっと霞ヶ関に来たがる。

原 うん、来たがるのと、それから……。まあ、それもありますけれどもね。

地方に行くとお気の毒なのは、地方の行政にかかわらせるんですよ。みんないやがっているが、仕方なしにやっけてる感じですね。九大だと九州とか、北大だと北海道とか、みんなこうなっているんですね。だから、似た現象が起こっているんですよ。

絵所 学者のほうでも、それを自分の権威付けに使っているんじゃないですか。お互いさまなんでしょう。そういうメカニズムが、結局東京にはできあがってしまったということでしょう。

原 やはり大川、梅村、石川先生なんかを見ていても、ものすごく政策にかかわられたかという、そんなことはないですよ。まあ、いろいろなことはやられていましたよ。知っていますけれども。大川先生は米価審議会の会長をされたりしていますし、梅村先生も中労委とか何とかずいぶんやられたしということは知っていますけれども。

尾高 今に至るまで一番すごいのは石川先生ですね。来年、また新著が出版されます。

絵所 石川先生は、特に年をとられてからすごいですね。

原 石川先生はベトナムのときも、責任感でね、そしていつのころからか先生ご自身の生き甲斐のようにもなっていたと思います。ぼくなんか、嶋田さんもよく知っていますけれども、先生はおれの学問の集大成だと、はっきり言われました。それをぼくはベトナムでやってみたいんだと言われました。これは非常に鮮明に覚えています。

尾高 ということは、政策に役に立つわけですね。

原 ですから、石川先生は最後に政策ということも考えられたんですね。それ、ちょっとあったんだと思います。ただ、石川先生の政策提言は難しすぎて（笑）。

尾高 石川先生のスタイルは、観察にもとづく理論があって、その理論がもとになって政策が出てきて、その政策提言をするという構造になっていますね。

絵所 見事です。あそこまで首尾一貫性があるというのは。迫力もあります。

原 だから、皆さん政策には絡んでいるんですけども、やはりどちらかという、自分の理論と実証といった方に重点があったのではないのでしょうか。

尾高 社会的な役割分担というところからいうと、研究者は、根っこのところ（データ集め）と、理論の磨きと、それからその両方をつなぐ研究をやるのがいちばんの基本で、それをどのように料理して使うかは、官僚、役人、そして政治家がやってくれるべきですね。

原 本当はそうなんです。

尾高 そのところは、役人の方々がもっと腕を磨いてくださらないと……。もちろん、両方で交流するほうがいいのかもかもしれませんが、そういう構造にはなっていないですね。学者に最後に役に立つところまでやれというのは、期待のしすぎではないか。もちろん、そういう人がいてもいいけれども。

原 いてもいいんですけれどもね。

尾高 だから、そういう意味で乱暴に言うと、学者は役に立たないことをやっているのでもいい。机上の理論でもいい。

絵所 役に立つか立たないかは自分が考えることではない。

原 大川先生の師にあたる東畑精一先生は農政審議会とかいろいろな審議会に関わられた先生です。こういうイメージをわれわれはもっていますが、どうも先生は大層不思議なひとです。あれくらい審議会に絡んでおられながら、正面きって政策論を展開されたことはほとんどないのです。

東畑先生は、1936年に出た『日本農業の展開過程』ではっきりと政策論はやらないと書かれています。途中の文章に、いまだに日本の経済官僚は法学部出身者ばかりで、これでは政策の純粹経済分析ができないといった文章を書かれています。

東畑先生は具体的な政策の発言を全然していないんですよ。たぶんシュンペーターからずいぶんそういうことを学んだのかなという気がしますけれどもね。

尾高 でも、シュンペーターは大蔵大臣だった。

原 シュンペーターは大臣として失敗しているから（笑）。東畑先生は、「問題の解決とは、問題を他に転がすだけだ」とよくいわれていたようです。ある政策を取ると、当面の問題が解決するように見えるけれども、実は違うところに別の問題が起こっているのです。問題が別のところに転がっていただけだ。こういう発言を先生はされているんですよ。

だから、非常にピュアなモデルになっている経済の世界と実際がずれているか、あるいは実際の経済はモデルよりは膨らみがあるので、抽象理論だけを基盤にした政策はどうしても部分的解決にしかなりえない。こういったことを東畑先生はわかっていたんだと思うんですね。自分たちが取り扱っている経済学のモデルとか理論の枠組みというのはどんな制約条件を前提にしたものであるのかということを、やはりはっきりと自覚していないと、そういう言葉は出てきませんよね。

絵所 その場合、おおもとにあるモデルとか理論自身は変わらない普遍的なものと考えているのかな。

原 東畑さんの場合は、あまりなかったかな（笑）。シュンペーターをうまく使っているだけで。

尾高 東畑先生には、ご自分の理論ってあったんですか。

原 よくわかりませんが、外からはあまり透明にはみえません。先生はレトリックの名人で、ものすごく本を読んでいた人ですね。とにかく膨大な本を持っていたというんですよ。

絵所 昔の人はみんなよく読んでいましたね。

10. 処女作に還る

尾高 シュンペーターの話が出ましたけれども、シュンペーターはどこかで、人は処女作に帰ると書いたんですね。ぼくも及ばずながら……。

絵所 先生の処女作は何だったんですか。最初は二重構造論？

尾高 処女作というのはね。

絵所 最初の論文？

尾高 最初の論文を処女作というんですか？

薮見 そうでしょうね。

尾高 そういう意味の処女作は、『一橋論叢』に載せた「労使関係の経済学」。

でもそういう意味の処女作ではなくて、ぼくはもっと根っこのところで、高校生時代に自然と関心があったかところへ帰るのかなとは思っています。先ほどそういう話をちょっとしたんですけれども、経済哲学とか……。

絵所 マシュー・アーノルドではないんですか。それともバージニア・ウルフ？

尾高 バージニア・ウルフではないですけど、マシュー・アーノルドく

らいまで行くかもしれない。

覇見 長いあいだどうもありがとうございました。